

保育者養成におけるピアノ教師の力量形成の試み

A study of developing piano teachers' abilities in training of kindergarten teachers

高御堂愛子、横井一之、岩佐明子、渡邊さらさ

Aiko TAKAMIDO, Kazuyuki YOKOI, Akiko IWASA, Sarasa WATANABE

キーワード：保育者養成、ピアノ教師、音楽指導、力量形成

Key words : kindergarten teacher's training, piano teachers, music instruction, developing abilities

要約

保育者養成において音楽指導は重要である。ピアノ教師は音楽指導の中で大きな役割を果たす。保育学の教師が、ピアノ教師に課題を課した。保育を理解した教師としての力量を形成して欲しいと願ったからである。保育の6回の課題に取り組んだ後、ピアノ教師の力量が高まった様子を考察し、まとめた。

Abstract

Music instruction is essential for kindergarten teachers's training. Piano teachers play an important role in it. Teachers in early childhood education give some subjects to them, as a way of developing their abilities as well as studying kindergarten education. We give careful consideration to the process of developing their abilities.

1. 研究の目的

(1) 人文学部発達教育学科の音楽指導の概要とピアノ教師に求められる力量

本学科の音楽授業について、以下に説明する。音楽授業は、音楽Ⅰ（ピアノ・音楽理論）～音楽Ⅷ（音楽表現②）までの8講座から成っており、開講年次は1年次から4年次までである。

音楽Ⅰ（ピアノ・音楽理論）～音楽Ⅳ（ピアノ・弾き歌い②）は、1年次、2年次に開講しており、教職課程科目の必修科目として4単位取得しなければならない。音楽Ⅴ（アンサンブル）～音楽Ⅷ（音楽表現②）は3年次、4年次に開講しており選択科目である。

音楽授業の特徴は、音楽Ⅰ～音楽Ⅷの各種類の音楽授業において必ずピアノの実技が取り入れられていることである。つまり、本学科では、希望すれば卒業時までピアノの実技指導が受けられるプログラムとなっている。

平成20年度春学期の「音楽Ⅰ」の授業内容を以下に述べる。音楽Ⅰ（ピアノ・音楽理論）の授業の目的は、小学校・幼稚園・保育所において必要とされる音楽技術の習得、音楽援助・実践ができる教員、保育者の養成を目指す。内容は、ピアノの基本的な演奏技術の習得と子どもの歌の弾き歌い、伴奏などに必要な楽譜の知識、読譜力、音程、コード等の理解をすることである。学生は90分の授業を半分に分けて「音楽理論」と「ピアノ」を45分ずつ受講する。「ピアノ」は個人レッスンで、少人数のためグレード制は導入していない。ピアノ教師はこの「ピアノ」の授業を複数で担当する。この内の2名が著者の岩佐と渡邊である。

一方「音楽理論」は、ピアノなどを演奏するために楽譜を読む基礎知識を学ぶ授業で、すべて高御堂が担当している。学生は6グループに分かれ、45分間の授業が6回展開されている。授業はML（ミュージック・ラボラトリー）教室で行われている。ML教室では教師の演技をディスプレイに表示したり、音符の実際の位置を鍵盤の表示で即座に確認できるなど、その利用効果は大きい。「音楽理論」と「ピアノ」は音楽授業の両輪で、授業後の学生、特に初心者からの「音楽的理解が深まり、ピアノを弾くことが楽しくなった」という感想を大変うれしく読んだ。

高御堂は常々「保育者養成校のピアノ教師にはピアニストはいらない」と檄を飛ばしている。つまり、学生が卒業後に保育者になったときに、子どもと音楽を楽しめる保育者像を描いてピアノ指導ができる教師を求めている。もちろん、より高いピアノ演奏技術を求めることは大切である。しかし、演奏技術の向上を第一にして、学生に無理な要求をして萎縮させてしまったり、やる気を奪ってしまったりは、指導者として不十分である。このことは、保育者が子どもを指導するときに配慮すべきことと同じである。この意味から、保育者養成に携わるピアノ教師には、幼児の発達や保育についてよく勉強してほしいと思う。このことが、音楽が好きな学生を育て、その学生が保育者となり子どもに関わることにより、心から音楽が好きな子どもが育つからである。

(2) ピアノ教師が保育者養成を理解する意味及び本研究の目的

保育者養成において、ピアノ教師が学生とかかわるのは、基礎技能（音楽）の指導においてピアノ演奏を指導する場合である。横井はかつて7校で保育者養成にかかわったが、すべての養成校の基礎技能（音楽）において、基幹の楽器はピアノであった。本学においても基礎技能（音楽）の指導にピアノ教師がかかわっている。筆者の岩佐と渡邊はそのメンバーである。

ピアノ教師はピアノ演奏について高い技術と知識を備えている。またこの試みに参加したピアノ教師5名はすべて高校と中学校の教諭免許状（音楽科）を有している。つまり、ピアノ指導や音楽指導者として十分な資格がある。それでは、保育者養成施設の指導者としては十分であろうか。

保育者養成校の教育課程では音楽関係の単位の取得が必要である。具体的には幼稚園教諭一種免許状を取得する教育課程では表1にあるように39単位中2単位、保育士資格を取得する教育

課程では表2にあるように必修単位50単位のうち3単位の音楽関係の単位の取得が必要である。教育課程上は、ピアノ教師の技術と知識が保育者養成において期待される単位数は1割を超えない。もちろん、保育者養成に造詣の深いピアノ教師もいれば、そうでないものもある。

前述したように、本学においてはピアノ指導は学生とのマンツーマン、1対1を基本としているので、ピアノ教師が音楽的素養のみならず高い人格をそなえていることが望まれる。また、学生が講義で学習する保育内容等についても、十分と言えないまでもある程度まで理解していることが、学生理解及びピアノ指導の上で大切である。

そこで、ピアノ教師が保育の全体的知識を求めた場合、保育を専門的に指導している教員がどのように支援することができるかについての一つの試みを実践した。5名のピアノ教師が保育に関する知識を得ることにより、ピアノ指導において効果があることを実証したい。本論題の力量はピアノ指導そのものの力量ではなく、ピアノ教師が保育について学ぶことにより知識が深まり、学生に指導する場合により共感的、受容的に関わることができるようになり、教師と学生が切磋琢磨、信頼感に満ちた学習状態を整えることができるようになること、つまり教師としての総合的の力量のことである。

表1 免許取得のための単位
(幼稚園教諭一種免許状)

教職に関する科目		
科目区分等	単位数	授業科目
教職の意義等に関する科目	2	教職概論
教育の基礎理論に関する科目	6	教育原理等
教育課程及び指導法に関する科目	1	保育内容の研究・表現Ⅰ(音楽)
	1	保育内容の研究・表現Ⅱ(音楽)
	16	その他(保育内容総論等)
生徒指導、教育相談及び進路指導等に関する科目	2	教育相談等
総合演習	2	総合演習
教育実習	5	教育実習・教育実習指導
最低単位数	35	

表2 資格取得のための単位
(保育士資格)

告示別表第1による教科目	単位数	授業科目
保育の本質・目的的理解	14	社会福祉等
保育の対象の理解に関する科目	15	発達心理学Ⅰ等
保育の内容・方法の理解に関する科目	1	保育内容の研究・表現Ⅰ(音楽表現)
	9	その他(保育内容・乳児保育等)
基礎技能	1	音楽Ⅰ(ピアノ音楽理論)
	1	音楽Ⅱ(ピアノ歌唱)
	2	その他(図画工作Ⅰ等)
保育実習	5	保育実習Ⅰ等
総合演習	2	総合演習
合計	50	

2. 力量形成の方法

平成 19 年度に NHK 教育テレビで放送された子育て番組を高御堂、横井と 5 名のピアノ教師と一緒に視聴し、1 週間後に各ピアノ教師がその内容についてレポートを横井まで電子メールで報告した。横井はそれにコメントを加えて、各ピアノ教師へ返信した。これを 7 週間の間に 6 回繰り返した。6 回の電子メールのやりとり終了後 1 週間経た時点で、横井が各ピアノ教師へ「ふりかえり」報告書を送信し、1 週間で返信するように課した。以下に、支援の対象とした被験者についてと、子育て支援番組について詳述する。

(1) 被験者について

この支援の試みに参加したピアノ教師は A 短期大学こども学専攻助手 3 名と本学非常勤講師岩佐と渡邊の 2 名、合計 5 名である。5 名のピアノ教師のプロフィールは次のとおりである。

5 名のうち 1 名が四大ピアノ専攻卒業、3 名が大学院（専修）ピアノ専攻修了、1 名が大学院（専修）音楽教育専攻修了である。また、教職歴は 1 名が保育者養成 3 年目、3 名が保育者養成 2 年目でうち 1 名は保育所経験が 1 年（累計 3 年目）、1 名が保育者養成 1 年目である。

(2) 子育て支援番組について

高御堂、横井とピアノ教師が視聴した子育て支援番組は次の表 3 の 6 番組である。

表 3 子育て支援番組（NHK すくすく子育て）

番	放送日	タイトル	レポート提出日
1	2007.05.12.	叱り方	2008.06.18.
2	2007.09.01.	習い事	2008.06.25.
3	2007.11.10.	おもちゃ	2008.07.02.
4	2008.01.06.	言葉を育てる 3 つのつぼ	2008.07.16.
5	2008.01.12.	赤ちゃんの脳	2008.07.23.
6	2008.03.08.	親子で歌	2008.07.30.

3. 結果

(1) 事前調査

番組の視聴、レポート提出、レポートに対するコメント受理の一連の支援活動を行う前に、以下の事前調査を行った。

①保育について興味があること

5 名のピアノ教師が保育に関して何に興味があるか質問し、回答が以下のようである。

表4 ピアノ教師が保育について興味があること（順序不同）

番	興 味 の 内 容		
1	幼児の心の発達について	しつけについて	幼児の体の発達について
2	言葉の習得	人間関係の作り方	-----
3	年齢に応じた保育	男性保育士の役割	子どもの集中時間
4	父性と母性について	保育環境について	しつけについて
5	子どもの発達状況	しつけについて	子どもの病気について

②性格等について

次に、5名のピアノ教師の性格等の27の質問に対し、否定：1点、やや否定：2点、やや肯定：3点、肯定：4点で答え平均点の高い順に並べたものが表6である。番は項目の番号、数値は5名の平均値である。ただし、20番のみ4名の平均値である。

表5 ピアノ教師の性格等

番	質 問	平均	番	質 問	平均
4	教えることは好きだ	4.0	3	学生に理解ある	3.2
5	音楽は得意だ	4.0	7	国語は得意だ	3.2
19	母親とよく話す	3.8	26	稽古事をたくさんした	3.2
20	父親とよく話す	3.8	10	ほめるのが得意だ	3.0
24	発達に興味がある	3.8	16	遊具に興味がある	3.0
21	幼児からピアノを練習	3.6	6	数学は得意だ	2.6
13	歌は好きである	3.4	12	幼児は指導しやすい	2.6
15	赤ちゃんに興味がある	3.4	18	お金の計算が得意	2.4
17	玩具に興味がある	3.4	27	成長に体罰は必要だ	2.0
22	話すことが好きだ	3.4	11	叱るのが得意だ	1.6
23	言葉の発達に興味がある	3.4	14	カラオケによく行く	1.6
25	子どもの遊びに興味がある	3.4	8	男子学生は苦手だ	1.0
1	明朗快活	3.2	9	女子学生は苦手だ	1.0
2	根気強い	3.2			

③ピアノを学生に教えるとき、特に気を付けていること。

5名のピアノ教師が指導するときに気を付けていることを自由記述した。

表6 ピアノを学生に教えるとき、特に気を付けていること（順序不同）

番	ピアノの指導の上で気を付けていること
1	一番伝えたいことは「音楽は楽しむもの」ということなので、強制はしたくはないと思っている。間違いは正さなければいけないが、できるだけ本人が自発的に上を目指したいと思えるような工夫をしているつもりである。
2	小さな感動体験を出来るだけさせること。音楽を演奏する楽しみ、出来たという喜び、音楽を介してその場にいる教員、学生で同じ感動を分かち合う事で、より音楽への興味を引き出し、モチベーションを上げたい。
3	宿題で出した曲を、一度は最初から最後まで通して演奏してもらいます。（その時は私は横から口出ししません。 その場でクリア出来そうな課題（注意）と、家で繰り返すことで出来そうな課題（注意）を両方示します。
4	まずは、音楽が楽しむことができるよう、心がけている。それには、苦手意識を取り除く必要があるので、なるべく肯定的な言葉がけをし、注意すべき点が10あるうち、実際に指導するのは2つか3つに押さえておく。
5	学生一人ひとりの技術レベル、ピアノのレッスンに対する意欲を把握し、レベルに見合った課題を提出する。レッスン中は否定的な言葉をなるべく使わず、まずできるところを褒め、その上でさらに良くする為のアドバイスという形で、指導を行う。

(2) ふりかえりの中での記述等より

6回の視聴とレポート提出、そしてそれに対するコメントを受理し、それから1週間後に「ふりかえり」のレポートを書いた。その内容は①最も印象に残っている番組とその理由、②最もためになったと思う番組とその理由、③学生に最も見せたいと思う番組とその理由、④最も興味をもたなかった番組とその理由、⑤番組視聴による発達観の変化について、⑥番組視聴によるピアノ指導の変化、⑦番組視聴による日常生活の指導における変化、の7項目である。①～④はピアノ教師が選択した番号を以下に羅列する。6番目の最頻番号は5名の教師のうち最も選択の多かった番号である。

表7 ①～④項目への各教師の回答及び最頻回答

教師番号（順序不同）	1	2	3	4	5	最頻番号
①最も印象に残っている番組	4	2	5	6	6	6
②最もためになった番組	1	1	4	5	1	1
③最も学生に見せたいと思う番組	1	3	3	3	6	3
④最も興味をもたなかった番組	2	4	2	4	2	2

⑤への回答は以下のとおりである。(自由記述)

表8 発達観の変化

番	この試み終了後における発達観の変化
1	全てにおいて、周りの大人が躍起になって教育しなくても、子どもは育っていく力を持っているのだと、少し安心させられた。
2	「子どもは親があえて何かを学ばせようと与えなくても、普段の生活上の経験から自然に学ぶ」とNo.6の感想にまとめたのですが、学生への指導の上でも同じ事が言えるのではないかと思います。「教師」という立場から色々言葉を発して指導はするけれど、学生にとっては人生の道しるべ、ヒントのようなものなのかなあとと思います。 といって、パワーのない教師は嫌だし、パワーがありすぎてもエゴの押し付けになることもあるし……。加減が難しいですね。
3	脳と体は同時に発達していくことが分かりました。例えば言葉ですが、今まで漠然に、言葉を発する事は脳のことで、遊びや運動と分けて教育するのでは、と思っていました。子どもの体の準備が出来て、発したいという気持ちになれば自然と言葉は出てくる事が分かり、無理に訓練するものではないことを知りました。
4	環境によって、子どもの発達は変化すると思うので、こういった番組を見ることは、良いことだと思います。発達については、個人差はありますが、資料から知るだけでしたが、より具体的な映像で確認することができ、漠然としたものから、輪郭が見えるようになりました。
5	今まで子どもの発達というと、首が据わるようになる、歩けるようになる、歯が生えるなど、体の成長の方に考えが行きがちであった。でも今回の番組を見て、体の成長よりも心の成長の方に目を向けることができた。

⑥への回答は以下のとおりである。(自由記述)

表9 ピアノ指導の変化

番	この試み終了後におけるピアノ指導の変化
1	小さい子どもの場合は「教える」というより「一緒に遊ぶ」というふうに、また「指導」というより「ここはこうの方が良い」というような「提案」というスタンスで行った方が、上手くいくのかもしれないと考えるようになった。
2	特にこの点が変わったという変化は感じておりません。
3	物事に興味をもち、楽しいと感じると、子どもは良く習得できることがわかり、これは学生でも同じなのではないか、と思いました。学生にとって難しい課題があった時に、まず練習の仕方を教えていたのですが、その課題にいかに関心をもたせるかという視点に変わりました。
4	ピアノ指導はしていない。
5	特にない。

⑦への回答は以下のとおりである。(自由記述)

表10 日常生活指導の変化

番	この試み終了後における日常生活指導の変化
1	指示をしたり注意をしったりする際、目的が明確に伝わっているかどうかを考えるようになった。伝わっていないときは、諦めるのではなく、別のアプローチの方法を考えるように心がけている。
2	「自分がこの言葉を発する事で学生がどう感じ、考えるか」という事を、以前よりもっと先行して考えるようになったかもしれません。
3	日常生活指導はしていません。
4	特にない。
5	戸外を歩いているとき、自然と子どもの動きを目で追ったり、友だちの子どもの成長を、ただ体が大きくなったという変化だけでなく、発達という視点から観察するようになった。また、自分が親だったらどうするかということをよく想像するようになったと思う。

4. 考察

事前調査①から5名のピアノ教師は、発達(心身、言葉、集中時間)、教育(しつけ、年齢に応じた教育)、健康(病気)、その他(母性、男性保育士、保育環境)について興味があることが分かった。

事前調査②から5名のピアノ教師は、外向的で人と関わるのが得意だといえる。教科は得意意識のある順に音楽、国語、数学である。また、お金の計算はあまり得意ではないと思っている。

これは一般の方のアンケートでも表れる傾向であるが、5名のピアノ教師は学生を叱るのが苦手である。

歌を歌うのは好きであるが、カラオケはほとんどいかないとのことだ。これは、歌を歌うのにカラオケは必要ないということだろう。

事前調査③から5名のピアノ教師は「一人ひとりの個性を大切に、学生の動機付けに配慮し、課題を難題、軽微なものを2種類準備し、自主性を重んじ教師の主張を抑え、肯定的な言葉を用いるように努めている」ことが分かる。

以上の事前調査から、視聴するすくすく子育ての番組を表3のように決めた。「1. 叱り方」は誰もが難しいと思うことであり、この調査でもピアノ教師は苦手と答えているからである。「2. 習い事」は、幼児の教育に関して各家庭で必ず問題になることであるし、5名のピアノ教師は幼少よりピアノを習い事としているので関心が高いと思われるし、ピアノは音楽演奏系の習い事¹⁾では高い割合を占めているからである。「3. おもちゃ」は子どもの発達にはなくてはならないものだからである。「4. 言葉を育てる3つのつぼ」は子どもの発達を多面的にとらえるという点でよい内容だと考えられるからである。「5. 赤ちゃんの脳」は心身の発達の原点である脳を取り上げているからである。「6. 親子で歌」は、この調査で分かるようにピアノ教師が

「歌は好きである」と答えており、歌はピアノを含む音楽の原点だと考えたからである。

6回の視聴、レポート提出、コメントの受理を終えてから1週間後に5名のピアノ教師は「ふりかえり」を書いた。その中で、5名の回答数が最も多かった（最瀬）のは①最も印象に残っている番組については「6. 親子で歌」、②最もためになった番組については「1. 叱り方」、③最も学生に見せたいと思う番組については「3. おもちゃ」、④最も興味をもたなかった番組については「2. 習い事」である。

①最も印象に残っている番組は「6. 親子で歌」であるが、このとき5名のピアノ教師が提出したレポートを見ると、感想を書いた行数は、5名順番に、6行、7行、3行、13行、7行であり、1名をのぞき多くの感想を書いている。

表11は、番組を視聴したあるピアノ教師の感想である。他の3名も「楽しそうに歌っている」、「表情豊かで楽しそう」、「歌い出すときの、子どもの表情がとても印象的」と肯定的に記述している。

表11 「6. 親子で歌」視聴後の感想例1

子どもが発達していく中で、歌はとても大切なものだと思う。教育という考え方ではなく、遊びの一環として歌を生活の中に取り入れることで、子どもは言葉では伝えられないことを歌で表現したり、親も子どもの気持ちを歌から感じ取ることができるのではないだろうか。自分の気持ちをなかなか言葉で表現しにくいすくすく世代（3歳まで）にとって、歌とはコミュニケーションの一部ではないかと思った。そう思うと、番組に出てきた姉妹のお母さんは、生活の中に本当に上手に歌遊びを取り入れて、子どもたちも生き生きとしているなど感じました。

②最もためになった番組は「1. 叱り方」であるが、教育実習中の指導教官からの「叱り方」の助言を思い出した者、体罰を肯定していたが自分の子どもを育てるときのことを思い浮かべた者、叱るときの信頼関係の大切さを再確認した者がいる。このように、叱り方は子育てにおいても重要な関心事である。

③最も学生に見せたい番組は「3. おもちゃ」であるが、だれにも理解しやすいうえに、興味深い内容なので、ピアノ教師がそのような考えたのであろう。

④最も興味をもたなかった番組は「2. 習い事」であるが、ピアノ教師は小さいときからピアノを習っており、各人十分に考えてきたことなので、特に新鮮に映らなかったのかもしれない。

⑤発達観の変化について、表8にあるように「大人のみが躍起になっても仕方ない」「教師の指導は、道しるべ、ヒント」「脳と体は平行して発達する」「発達について、具体的に視聴できた」「発達を身体の変化を中心に考えていたが、心の成長を見るようになった」と、発達観が変容したことを述べている。

⑥ピアノ指導の変化について、表9にあるように「子どもは教えるより、一緒に遊ぶ中で学ぶという方法で」「楽しくということに目を向けると、子どもはよく習得するが、これは学生も同

じだろう」と変容を述べている。

⑦日常生活指導の変化について、表10にあるように「指示するとき、目的が明確に伝わるかどうかを考えるようになった」「自分の言葉を、学生の側から考えるようになった」「発達の視点から子どもや学生を見るようになった。また自分が親だったらと考えるようになった」と変容を述べている。

教師の初歩的な段階での話だが「一生懸命指導しているのに、学生はどうしてがんばってくれないの」と悩むときがあるという。⑤では子どもや学生の発達に目を向けて、時間をかけて指導する冷静さが備わってきたことがわかる。この視点は、保育では「待つ保育」と言われることもあり、教師や保育者にとって大切な資質である。

⑥では、記述したのは5名中2名のみであるが、1人は「押しつける指導でなく提案する方がよい結果が得られること」に気づいている。また2人目は「学生の自主性を大切にすること」を唱えている。親業²⁾において「あなたメッセージ」より「わたしメッセージ」の有効性が唱えられるが、前者はこのことに気づいている。

⑦では、各ピアノ教師が保育を学ぶことにより、発達や学生の心理について予見性を持つことができるようになり、指導に余裕が生まれていることがわかる。かつてなら、すぐに行き詰まってしまった指導が、時間的に余裕をもってのぞむことができるようになり、指導時にゆったり構えることができるようになった。

5. まとめ

高御堂は「ピアノ教師は演奏技術の指導はもちろんのこと、実際の指導場面では学生の心情に共感、受容することが大切である」と説いている。小学校、幼稚園、保育所を問わず、昨今教育・保育現場ではカウンセリングマインド³⁾を持ち合わせた指導者が要望されている。本学科は教師、保育者養成施設なので、学生に対してよき指導者であると同時に、ピアノ教師が教師としてのモデルとなりえることが望まれる。この点からも、この試みは大きな意味があったと言える。

教員の力量形成については、教師教育^{4) 5)}とか「先生（教師）を育てる」⁶⁾という言葉で表されることがある。最近ではFD（ファカルティ・ディベロプメント）（大学教員の教育能力を高めるための実践的方法）⁷⁾が導入されている大学も増えている。本研究は、FDに及ぶ以前の大学教員自身の資質向上を、他の教員との連携の中で目指したものである。

さて、主題であるピアノ教師の力量であるが、この試みを通してよりよく形成されただろうか。上記の考察の最後で、5名のピアノ教師はこの試みを通して⑤時間をかけて指導する冷静さを備えた、⑥私メッセージの有効性に自ずから気づいた、⑦心理学的に予見性をもつことができるようになったとあり、明らかに保育士養成施設の教師として質的に向上したといえる。その量的な向上については、5名で個人差もあるし、とらえ方も難しいが、学生への接し方が向上したことは

間違いない。

今回、横井が高御堂の助言をいただき、音楽の専門家であるピアノ教師と交流できたことは、保育を多面的にとらえるという視点から大きな成果があった。学生からよく耳にすることとして「同じ内容を他の教科でも学んだ」という声がある。大学教育においては各教師の講義内容が重複する場合がある。担当者が他の授業内容について、積極的にチェックしようとしなからである。自分が担当していない授業内容についても理解していることは、学生理解や授業をなめらかに展開する上からも大切なことである。その意味で、各教師が日常的に情報交換することは大事である。「～曜日サロン」と銘打って、定期的に専門領域の情報交換を行うのも有効である。本研究がそういうものの端緒となれば幸いである。

参考文献・引用文献

- 1) 日本子ども家庭総合研究所・日本子ども資料年間・2008・KTC 中央出版・p305
- 2) トマス・ゴードン・親業・1977・大和書房
- 3) 池田祥太郎・保育とカウンセリングの出会い・1998・あいゆうびい
- 4) 小松郁夫・教師教育研究の紹介・教師教育1・1985・東洋文化出版社・pp100-110
- 5) 東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センター・教師教育改革のゆくえ・2006・創風社
- 6) 朝日新聞教育取材班・教師力・2004・朝日新聞社
- 7) 洞口治夫・ファカルティ・ディベロプメント・2008・白桃書房